

令和 7 年度 自己評価及び学校関係者評価書

令和 8 年 3 月 13 日

札幌市立 ひばりが丘小学校

1 今年度の重点目標

- (1)重点目標 子どもの声を聴き、それに応える学校 ～子ども自らが「自分の未来を拓く」教育をめざして～
 (2)全校テーマ「ひとりのキラリは、みんなの輝き」
 ひとりのキラリ「自立」～自ら学び、自ら考え、正しく判断し、最後までやり遂げる子ども
 みんなの輝き「共生」～他を思いやり、他を認め合い・支え合い、他のよさに気付く子ども

2 本年度の経営方針

- (1)「知」:基礎・基本の学力向上と主体的に学ぶ力を育てる
 (2)「徳」:明るい挨拶を大切に、支え合い、思いやりの心を育む
 (3)「共」:決まりを守り、協力して正しい社会をつくる子どもを育てる
 (4)「体」:生活を見つめ、運動に親しむ、健康な体と心を育む

3 自己評価結果に対する学校関係者評価

分野	重点項目	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
			達成状況	改善方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
目指す子ども像	「自立」と「共生」	◇「自立」 自ら学び、自ら考え、正しく判断し、最後までやり遂げる子ども ◇「共生」 他者を思いやり、他者と認め合い・支え合い、他者のよさに気付く子ども	A	○児童自らが判断したり、選択したりする場を意図的に設けることで、主体的で意欲的な活動場面が増えた。 ○昨年度同様に、体験的な学習や専門家を招いての学習などの教育活動を大切にできたことで、児童が意欲的に取り組む姿が多く場面で見られた。 ○運動会、学習発表会などの行事、異年齢交流や日常の学級・学年の活動などにおいて、目標設定や振り返りの場を大切にできたことで、児童がみんなで力を合わせる体験や喜び、達成感を味わうことができた。とくに遠足や集会などの異年齢交流の活動を通して、上級生が下級生に優しく声を掛けるなど、互いに思いやり、認め合い、励まし合う姿を見ることができた。 ●児童が判断したり、選択したりする場の充実を図ることで、「自ら考え、判断する力」「他者と関わり、協働する力」を育むことができるよう、意図をもって活動を構成していく。	A	A
学校関係者評価委員会による意見		◎町内会の行事に参加する児童を見ていると、毎年、進級した学年に相応しい姿に成長しています。 町内会役員一同、毎年、再会を楽しみにしています。 ◎「自立」と「共生」の目標に合致した成果が得られていると考えます。 ◎コミュニケーション力や創造性を高めるため、非認知能力を育む活動に積極的に取り組まれていることが素晴らしいと思います。				

人間尊重の教育	相互承認を通して高める「自分が大切にされている」実感	◇様々な活動を通して、他者のよさを認める相互承認 ◇子どもの声を聴き、自己有用感が高まる子ども	B	○運動会では、低中高のブロックごとに上の学年が下の学年にダンスや表現を教える活動をしている。お互いのよさを認め合い伝え合うことで動きの質が高まることは子ども自身の大きな自信につながった。意欲の向上とともにお互いを認め合う素晴らしさを実感することができた。 ○学習や行事などの教育活動全般で「子どもの声を聴く」ことを意識して進めている。子どもの発想を存分に生かした委員会活動、運動会・学習発表会では、子どもの願いや思いを基盤に学習計画を立てており、子どもの意欲が向上している場面が多く見られるようになってきた。 ●相互承認の継続や子どもの声を聴くことを基盤にした教育活動を通して、どの子にとっても「自分は大切にされている」と十分実感しているかは、まだ発展途上である。今後は、子ども一人ひとりが自己承認を高められる具体的な取組を検討していく必要がある。	A	A
「学ぶ力」の育成	「個別最適な学び」と「協働的な学び」	◇児童の実態に即した細やかな学習指導、専門性の高い教科指導 ◇教材化の工夫、「児童が学びを選択する機会の設定」、学び合いの場の充実を大切に授業づくり ◇体験的な学びや、本物に触れる専門家からの学び	A	○子どもの学習の状況や実態を的確に把握しながら、一人ひとりに適したきめ細やかな学習指導を続けてきた。また、今年度は専科教員による理科や図工、外国語などの学習を多く行った。専門性の高い教員が指導をすることで、子どもは教科特有の学びの楽しさを味わい、学習意欲の高まりが見られてきている。 ○全校の職員で授業を見合ったり、日常的に学年やブロックで授業について検討したりしてきたことで、「個別最適な学び」や「協働的な学び」を目指す職員の意識は醸成されてきている。 ○「児童が学びを選択する機会」を、大切にすることで、意欲や主体性を引き出すことができた。 ○体験的な学びや、本物に触れる専門家からの学び、校外学習やゲストティーチャーを招く学習を数多く盛り込んだことで、児童の意欲を引き出すことができた。 ●「個別最適な学び」や「協働的な学び」の実現については道半ばである。次年度も学びのサポーター、副担任の効果的な活用や授業研究の充実を図りたい。	A	A
「豊かな心」の育成	他者との関わりを通して心の成長	◇仲間との関わりや、振り返りと価値付けを大切に授業づくり ◇異年齢交流 ◇いじめ防止対策委員会の定期的開催、いじめの未然防止・早期発見、命を大切にする指導	A	○行事や異年齢交流、日常の中で、たくさんの仲間、職員と関わり、「ともに創り上げる」「やり遂げる」体験を積み上げることで、人間関係形成力や、思いやり・協力の大切さ等を学ぶことができた。 ○昨年度からいじめ防止対策委員会を毎月1回開催すると同時に、全市で「シャボテンログ」というアプリを使って、毎朝、児童の心と体の健康観察に取り組んで、いじめの早期発見と、チームとしての早期対応に努めてきた。また、従来どおり9月の「命を大切にする月間」、6月と11月の2回、児童を対象に「悩み・いじめに関わる調査」を行い、調査後には担任が全児童と個別に対話し、詳細な状況把握に努めてきたことで、大きな問題にならずに、児童が安心して登校できている。 ●児童の振り返りや教員による価値付けをより大切にすることで、児童が他者との関わりを通して自己や集団の成長を、一層実感できるようにする。	A	A

「健やかな体」の育成	運動や自分の体への意識の高まり	◇体力や運動能力の向上につながる活動・場の設定 ◇心身の発達を促す外遊びの推奨 ◇健康な体づくりやより良い生活習慣につながる食育指導	A	○「ボール投げ」「マット運動」「跳び箱運動」「大谷DAY」「体づくりDAY」などに全校で取り組む週間を設けたことに加え、外遊びを推奨し、グラウンドにドッジボールコート常設していることもあり、元気に遊ぶ児童が増えている。 ○全校でなわ跳びに取り組み、児童が目標に向かって練習してきたことで、なわ跳び自体の上達とともに、体の動かし方、タイミングの大切さ等への意識が高まった。また、友達同士励まし合ったり、目標達成した時に喜び合ったりしたことが、意欲の継続に大きな効果を上げてきた。 ○毎日の給食カレンダーの「一ロメモ」や、日本各地や外国などの伝統料理を食べる機会を設けることで、児童は、栄養、食文化、食事のマナーなどを楽しみながら学び、自分の体への意識を高めることができた。 ●子どもたちの体力は、あまり向上していないため、今後も意図的に運動の場を設けたり、遊びの中で体を動かしたりできるようにすることで、体力の向上を目指したい。	A	A
いじめ対策	チーム学校としてのいじめ対策	◇学校全体での情報の共有化を定期的実施 ◇SCやSSWと連携による子どもの心のケアと見守り	A	○いじめ防止対策委員会を月に1回開催していることで、全教職員で子どもの困り感に寄り添うことができています。今年度はいじめ対策に加え、特別な教育的な配慮が必要な児童や不登校傾向のある児童に対しての情報共有も行っている。幅広い事案に対して組織的に対応することができています。 ○年間を通じてSC（スクールカウンセラー）やSSW（スクールソーシャルワーカー）と連携して子どもや保護者の支援を行ってきた。専門的な知見からのアドバイスをいただきながら、的確な支援を長期的に実施することで問題が長期化する事案は減少していった。 ●いじめ事案に対して、迅速に組織的な対応は成果があがっている。ただし、いじめを起こさないという予防的な取組は、まだ改善の余地がある。特別委員会や校務分掌と連携しながら「いじめ予防」について検討をしていかなければならない。	A	A
一貫性・連続性のある教育(小中一貫した教育)	パートナー校との日常的なつながり	◇分科会を組織、そして年間を通じた定期的な開催 ◇9年間のつながりを意識した教職員の連携や活動の実施	B	○パートナー校（厚別南中・共栄小・大谷地東小）と連携して、教職員を6つの分科会に分けて年間を通じて活動することができた。授業の情報交流・あいさつ運動の実施・音楽会への招待など、実に多くの活動についてお互いを知りながら交流を深めることができた。小学校・中学校お互いの特色を理解しながら活動することは、子どもの連続性のある学びにとっても効果があった。 ●各分科会の進捗や決定したことは学校に共有されず、行事や活動に滞りが出た時期があった。今後は各分科会の活動を自校に確実に共有する仕組みづくりが重要である。次年度に向けての仕組みは計画したので、情報伝達が有効に機能していくように努めていく。	A	A
学校関係者評価委員会による意見		◎生涯必要とされる「思いやりの心」「豊かな心」は、小学生の年代から育てることが大切ですが、学校教育で強調されていることで、ありがたいと思います。 ◎体力向上の具体的な取組に学校が努力しているのがよくわかった。しかし、体力が向上していない理由を学校として把握・分析することが重要ではないだろうか。 ◎受信者が多いため、確かな情報が必要ですが、もうちょっとすぐーるを活用すればよいのではないのでしょうか。 ◎小学校と中学校の連携のための取組がよくわかった。今後も継続をしていってもらいたい。ていることがよく分かります。				

学校独自に 設定する分野	◇通級指導教室の効果的活用	A	○自校に通級指導教室があることを、効果的に活用することができてきた。具体的には、 ①通級指導の担当教員が、指導が入っていない時間帯に、配慮を要する児童に関わったり、教室を見て回って状況・実態を把握したりすることで、個に即した指導をより効果的に実現している。 ②通級指導の担当教員が講師となって、本校の職員を対象とした研修会を年間4回開催したことで、児童の見とりや見方、関わり方等について、たくさんのことを学ぶことができた。 ●今後も同様の取組を継続することで、全校で児童を複眼的に見とって指導できるようにしたり、職員の対応力を向上させたりしていきたい。	A	A
	◇教員の働き方改革	B	○定時退勤を促す日を設けたり、校務機を活用した情報活用を進めたりしてきたことで、一定の成果はあった。 ○電話転送の時間を変更したり、会議の進行を工夫したことで教職員の業務時間を確保することができた ●文科省や市教委から新しい業務・取組が次々に打ち出されることで、日々の業務がひっ迫していることは否めない。今年度は様々な調査な研修が余裕の無いスケジュールで設定しなければならない時期があった。令和8年度からは教育課程を変更することになる。教職員の時間を生み出しながら、質の高い教育を推進していく	A	A
学校関係者評価委員会 による意見	◎難しい事とは思いますが、文科省、市教委からの施策の対応について、貴校には必要なことを取捨選択し、先生方のため、児童のためにも、教育にゆとりをもたせてください。 ◎インターネット、スマートフォンの普及、SNSの対応等、時代の変化もあり働き方改革とは言っても、なかなか時間を作ることができないこともあると思います。子どもたちの笑顔は、そして学びは、先生方の頑張りに支えられているんだなあと、感謝しかありません。 ◎通級指導教室に通う子どもたちの増加、多様性の時代・・・、先生方もご苦労が多いなか、強みを生かしたり、工夫したりして、奮闘されていることが分かります。今後も、児童やご家庭に寄り添った指導を継続していただきたいと思います。				